



各地の臘扇忌

「了善寺臘扇忌」報告

東京都港区芝 了善寺 百々海真

六月八日、了善寺「臘扇忌」が勤まりました。島崎暁民師（石川県称佛寺前住職）から、「苦」清澤満之先生の手紙―正岡子規『病牀六尺』と題したご法話をZoom配信にて聴聞しました。

『病牀六尺』には、「本郷の某氏」からの手紙と子規の応答が収められています。因みに「某氏」とは清沢先生、と見出したのは西村見暁先生でした。

清澤先生は結核、子規は結核性の脊髄力リエス、島崎先生は老苦、病苦を通して、お二人の言葉を身で読んでおられます。

以下、法話の要約抜粋を以て、報告とします。南無阿弥陀仏

「第一、かかる場合には天帝又は如来とともにあることを信じて安んずべし」

「第二、もし右信すること能はずとならば人力の及ばざるところをさとりてただ現状に安んぜよ（後略）」（正岡子規『病牀六尺』七三頁 岩波文庫）

一切は如来のなさることだから文句はない、と。ところがやね、文句ないどころか、文句はあるわけです。この現実を如何せん

池田先生の教え

釈草深

①「そんなもん我執だ、我欲だ」
②「Tさん、そういうのを、娑婆腹をさぐる、と言うんですよ」

相對して、私一人に向かつて投げかけてくださった二つのお言葉。①は難民問題、②は懈怠の私に。①は阿修羅の形相で吐き捨てるように、②はふくよかなご尊顔と含み笑いのお声で。

教学的な内容で、特に清澤先生との関わりに関して強く残っているご法話は、西恩寺同朋講座での「伝統教学と近代教学の接点」「清澤満之の名号釈」。浜風臘扇忌での記念講演「私の清澤先生」。いずれも文章化されている。

私が西恩寺様に通うようになったのがいつからか、古いノートを引つ張り出して調べてみた。一九九四年八月四日。その日のページに「問題が明らかになった、それを背負っていくのが信心」と記してある。なんだ、今の私の課題ではないか。

聞き始めた頃は「自己と社会」、今は「獲信」。この二つの関連もよく分からずバラバラでいる。「そこを問うていくのです。」

池田先生は必ずおっしゃる。聞き続けてまいります。

と。清澤先生は子規の七転八倒を見られて、涙されたと思いますなあ。「如来に任せ」と。でも、こんなこと言うてもやね、うまいわけにいかん。その時はどうするか。

「第三、もし右二者共に能はずとならば号泣せよ煩悶せよ困頓せよ而して死に至らむのみ（後略）」

ここまで言うてもらわんと、たすからんのですよ。結核の清澤先生は「わしも一緒や」とおっしゃるわけや。泣きわめけ、気が変になれ、そして死んでいけ。ここがねえ、仏教が次の世紀に道を開く一点だど、私は思うのです。



値遇ということ

鈴木君代

親鸞聖人が「真実の教」として見出された『大無量寿経』に「嘆仏偈」と呼ばれている偈頌（うた）があります。それは法蔵菩薩が、国王として生きる自分の無明の闇を開いてくださった世自在王仏を讃嘆する「うた」です。

法蔵菩薩の目覚めは、「嘆仏偈」に「正覚大音 響流十方」（正覚の大音、響、十方に流る）とあらわされています。道を求めた法蔵菩薩にとつての「正覚大音」とは、師仏である世自在王仏の響き流れる御声でした。

仏法聴聞に全生涯を捧げた池田勇諦先生が、清澤満之先生の御誕生日（旧暦六月二六日の三日後に、いのちを終えて逝かれました。まさにその身を自信教人信に尽くし果たされた人生でした。近年の私は、生きる力溢れる池田先生のお話を聴聞させていただくたびに、この時間がいつまでも続くものだと思ひ込んでいましたから、その落胆はとてつもないものでした。

私が池田先生に初めてお会いさせてもらったのは、三〇年前東本願寺の同朋会館でした。教導補導研修会を担当していた私が、その時の講師であった池田先生を案内したとき、寺院出身でない私に「あなたは仏縁の深い子だ」と言われたのです。その声が値遇のはじまりでした。まさに仏縁とは本願に掴みとられた存在として今、ここにいることでした。それは私にとって、

「臘扇忌法要」報告 難度会事務局 奥野賢



去る七月一八日、大阪教区にて臘扇忌法要が難波別院同朋会館講堂を会場とし、難度会の主催にて勤修されました。今年は大谷大学文学部准教授の西本祐攝先生を講師に迎え、清澤満之先生の「我信念」のなかの言葉、「愚禿の親鸞という御言葉」を講題として講演をいただきました。

西本先生は、清澤先生や近しい方々の言葉を引きながらその生涯を紐解きつつ、『歎異鈔』と清澤満之についてお話しいただきました。清澤先生は『歎異鈔』を「予が三部経」として『阿含経』『エペクトスの語録』とともにあげておられるにもかかわらず、今まで清澤満之先生にとつての『歎異鈔』ということについての学習が疎かであったなと反省させられるお話でありました。

猛暑が続き過酷な夏となっているなか多くの方に参詣いただき、無事に法要を終えられましたこと、西本先生ならびにご来場の方々に感謝申し上げる次第でございます。

どうすることもできない無明の闇を問い直してくださった和田稠先生（一九一六―二〇〇六）の言葉と声と重なって響きます。法蔵菩薩から連綿と継承されてきた師との出遇いの歴史です。

池田先生が二〇一九年六月六日、西方寺「浜風臘扇忌」に出講されたとき、「わたくしにとつて清澤満之とは」との講題で語られました。「どこまでも教えとわたくしとの関係をあきらかにする」と聞法の意味を喝破されたそのお声は今も私の中で生きて響いています。

二〇二四年一二月二三日、桑名別院報恩講御満座の朝、西恩寺のお内仏にお参りされる池田先生の声をお聞きしました。勤行後に小さなお声で、幾人もの師の名前を呼ばれ、「今年も別院の報恩講に出講させていただきます」と、大切な法縁を拝承した喜びの報告をされていました。傍らには、清澤満之先生の教えに生きられた加賀の三羽鳥、暁烏敏師、高光大船師、藤原鉄乗師の書と写真がありました。先生と師仏がたとの値遇の世界でした。

先生は、還相の菩薩となつて、今もはたらき続けてくださっています。その忘れることのできない声は言葉となつて、悩み苦しむ私に「あなたにとつて教えとはなんですか？」と、今も問い続けてくださいます。南無阿弥陀仏。